エメ・サルの研究(1)

吉　川　守

この小論は次の諸節にわけて展開されるが，紙数の関係上，本稿はそのうち Ⅱ A) Ⅳ) までにとどめ，Ⅱ B) 以下は本誌上に他日を期したい。

＜は　じ　め　に＞
Ⅰ　序　　論
Ⅱ　本　　論
A) Eme-KU と Eme-sal との比較研究。
Ⅰ) Eme-sal 研究資料の所在。
Ⅱ) Eme-KU と Eme-sal の子音対応。
Ⅲ) Eme-KU と Eme-sal の母音対応。
Ⅳ) 論　　結
B) Eme-sal の言語的性格。
Ⅰ) Eme-sal に於ける異質性。
Ⅱ) 術語としての Eme-KU, Eme-sal。
Ⅲ) 文学テキストに於ける Eme-sal。
i) 女性語としての Eme-sal。
ii) Gala 僧の使用する Eme-sal。
Ⅳ) Eme-sal に於ける問題点。
＜お　わ　り　に＞

＜は　じ　め　に＞

シュメール語の中で標準語或いは主要方言として一般に認められている eme-KU は，著しい音韻推移の結果シュメール語の中でも特異な位置を占める eme-sal との比較に於いて，自らの姿をより鮮明に映発させ得ると考えられるのであるが，この方面での研究はペーベル A. Poebel 教授以後あまり活発ではない。

本稿では，いちおう接見可能なエメ・サル資料を総観し，基礎的な整理を行うと同時

に，そのような整理により提示される言語学的諸問題を，試論の形で提言して見たいと思う。従って本稿はあくまで筆者の中間報告であって，次に予定している“Syllabary の研究”，“Grammatical Text の研究”，“Vocabulary の研究”と共に，バビロニア人のシュメール語研究に就いての批判，攻究の一環をなすものである。

I
序　　論

後期シュメールの文献に散見する eme-KU および eme-sal を，“方言”と認める立場の学者も，また“方言”と認めない立場の学者も，これらの語詞を方言 (dialect, dialecte, Dialekt) という呼称をもって言い慣わしてきた。この両語に見える“eme”はアッカド語で *lišânum* の語が充当されているが，これはヘブライ語 *lâšôn*, アラビア語 *lisânun*, シリヤック *leššânâ* などに対応する語で，元来 ((舌，言葉)) を意味した。

このような eme をバビロニア人は七種類記録にのこしている。すなわち：
eme-KU, eme-sal, eme-si-sá, eme-gal, eme-sukud-da, eme-te(men)-ná, eme-suḫ-a の七種である。このうち eme-si-sá 及び eme-te-ná はそれぞれ eme-KU 及び eme-sal に対する異称に過ぎないとする見解が一般に行われているので，バビロニア人は少くとも五種類の eme の区別を認めていたと推定される。

ただ記録にのこしているとは言え，eme-gal, eme-sukud-da, eme-suḫ-a と eme-KU との対照例は鮮少で，僅か五種の語に就いての実例が残存しているに過ぎない。そのうちから親しみのある一例を下に挙げて見よう。

ZA 9, 159–164 (cf. Deimel, *Šumerische Grammatik* p. 52).

Col. III. 37)—IV. 7)

37)	na	*a-me-lu*	eme-gal
38)	sag	MIN(=*a-me-lu*)	[MIN ?]
1)	ur	*a-me-lu*	eme-sukud-da
2)	dili	MIN(*aṃêlu*)	eme-sukud-da
3)	za	MIN(〃)	eme-suḫ-a
4)	sa-an-taksantak	MIN(〃)	eme-suḫ-a
5)	mu-lu	MIN(〃)	eme-te(men)-ná
6)	$^{mu}mu_6$	MIN(〃)	MIN(〃 〃 〃)
7)	lú	MIN(〃)	eme-si-sá

さてこの対照表で左欄の九語はすべて *a-me-lu* ((人)) の同義語である。バビロニア人はシュメール語に於けるこれら九つの語詞の対立を eme の差異によるものとして理解し，この表を作成したものと考えられる。

この表で，7) lú は eme-si-sá "正しい eme" と傍記されているが，これは普通の Syllabary で eme-KU として知られている語であって，eme-si-sá と eme-KU とが同一視される理由である。また同じく 5) mu-lu もいわゆる eme-sal text 及び syllabary で eme-sal 語としてよく知られている語で，eme-te-ná を eme-sal の異称と看做す論拠となっている。

A. Falkenstein はこれらの eme のうち，eme-KU, eme-sal を除いた他の eme を Kunstsprachen (*Das Sumerische*, 1959, p. 17), 或いは Hochsprachen (*Sumerische und Akkadische Hymnen und Gebete*, 1953, p.29) と呼称し，A. Deimel 教授も Sprechweisen (ŠG. p. 53) と看做す見解に傾いている。そして両教授はこれらの eme を次の様に訳出し，理解しようとしている。

A. Deimel (ŠG. p. 52).

eme-gal : ‚die große, feierliche (?) Sprache'

eme-sukud : ‚die hohe, majestätische (?) Sprache'

eme-suḫ-a : ‚die ... (?) Sprache'

eme-te-ná : ‚die Grund (?)-Sprache'

eme-si-sá : ‚die grade (gewöhnliche (?)) Sprache.'

A. Falkenstein (*Das Sumerische* p. 18)

eme-gal : "grosse Sprache"

eme-sukud : "hohe Sprache"

eme-suḫ-a : "erlesene Sprache"

eme-te-ná : "schiefe Sprache"

eme-si-sá : "Normalsprache"

eme-sal : etwa "breite Sprache".

このように五種の eme を位相語とする考え方に，筆者も賛意を表したいのであるが，しかし，従来の学者の見解には注意すべき点がある。それは，これらの eme の区別が，バビロニアの学者の間で一般に承認されていたとか，もしくはこれらの eme が実際に位相語として厳存したとかを暗黙裡に認めているかのように見受けられる点で，このよ

うな拡張解釈にはなお再考の余地が充分にあるように思われる。その理由の一つとして次の例を指摘して見たい。

1) Assyriological Studies vol. I, No. 1 (B. Meissner, *Beiträge zum Assyrischen Wörterbuch* I) p. 78 (=CT. XVIII etc.)

7) lú	*a-mi-lu*
8) mu-lu	MIN eme-sal-la
9) lú-ulù^{lu}	*a-mi-lu*
10) ur	*a-mi-lu*
11) sag	*a-mi-lu*
12) (di-lib)dilib	*a-mi-lu*
13) (ni-ta)nita(ḫ)	*a-mi-lu*
14) za	*a-mi-lu*
15) na	*a-mi-lu*
16) nu	*a-mi-lu*
17) (di-li)dil	*a-mi-lu*
18) púš	*a-mi-lu*
19) (i-li)ì-li	*a-mi-lu*
20) a-da-ab	*a-mi-lu*
21) (di-lib) dilib	*a-mi-lu*

2) AS. No. 4, (B. Meissner : *Beiträge zum Assyrischen Wörterbuch* II) p. 78

a) za-a | za | *a-mi-lu*

これらの Syllabary では mu-lu は eme-sal と明記されているが，前掲のベルリン語彙 (Das „Berliner" Vokabular) に見える dili, ur (=eme-sukud-da), na, sag (=eme-gal), za (=eme-suḫ-a) に就いては特にその eme を明記するところがない。

その上，この Syllabary に収録された同義語の中には，本来"男"の意味である nita(ḫ) が含まれているし，lú-ulù^{lu}——Meissner はこれを lú-gàl-lu と翻字している——も正しくは下の *a-mil-tu* ((人類)) に配列されるべきであるし，12) dilib と 17) dili との間には明らかに語源関係が認められるので，このような同義語の列挙の仕方には疑問の余地がある。

他の理由は，上掲の対照表に見える語詞の多くが“人”の意で単独に用いられることがないからである。従って eme-KU (lú) 及び eme-sal (mu-lu) 以外の語は恐らく次のような場合から帰納的に摘出されたものと考えられる。

1) ur——: シュメール人の人名の一部として見られる ur，すなわち Ur-^{d}·Nanše ((ナンシェ神の下僕，英雄)), Ur-^{d}·Nin-gír-su ((ニンギルス神の下僕，英雄)) などの ur は元来“犬”の意味であるが，人名では“忠実な下僕，英雄”の如くに用いられているので，このような所から抽出されたとも考えられるし，普通名詞 ur-sag *ḳardu* ((英雄)), ^{lú}ur-geme *assinnu* ((去勢された人)) などから析出されたとも考えられる。

2) sag——: sag は普通 ((頭)) の意味であるが，初期王朝期の経済文書では奴隷を数える場合に用いることがある：

RTC. No. 26, Col. I

1) 1 sag-mí

2) Gigir-ta-pàd-da-àm

Nikolski. No. 174, Col. III

3) 8 sag-nita(ḫ)

4) 3 sag-mí

この他に DP. 75, Col. III にも在証されるが，このような用例と，次に示す人名の一部に見える，ur と同様な用法に着目して sag|*a-me-lu* が得られたものと考えられる：

DP. No. 120, 10/13 : Sag-^{d}·Nin-gír-su-da

Nik. No. 67, Col. V, 1 : Sag-^{d}·Dumu-zi-da

För. No. 170, Col. II, 3 : Sag-^{d}·Nanše-da

3) nu——: この語も単独では用いられないので，恐らく nu-šar ((庭師)), nu-bànda, nu-ma-su (〈nu-mas-a “半人前”?) ((未亡人)), nu-gig ((Hierodule)), nuḫatim ((料理人)) などの語から語源的に析出されたものではなかろうか。Fö. 155, Rs. Col. VI, 5) nu-sar-ke$_4$-ne, etc. 参照。

4) na——: この語も nu と同様，nagar ((大工)) などの語から分析によって得られたものと考えられる。

5) santak——: この語に就いては Studia Orientalia XI, 1 (=A. Salonen, Nautica Babyloniaca) p. 14 に Sm 12 (=CT XIX 23) Rs. Col. III 9 として，つぎの用例があり

erem-santak // *ṣâbu* MEŠ *sa-an-tak-ki*

Salonen 教授はこれを ≫ständige Mannschaft≫ と訳しておられるが，santak は一般的な“人”の意味では用いられていないようである。

6) mu——: この語には ur 同様 *eṭlu* ((英雄)) の訳語が与えられているが，giš=giš のエメ・サル形 mu を配列したものとも考えられる。

7) 他の za に就いては知る資料がないが，dili は明らかに *êdu* ((一人)) に由来するものであろう。

以上の諸点を考合して見ると，ベルリン語彙の作成者が当時一般的に認められていた筈である名称 eme-KU と eme-sal (Col. III, 18 に一例だけ eme-sal の名が見えるが，これは eme-gal の書き誤りとする説がある，Del. S. Gr. §26, a) を用いずに，わざわざ新しい名称 eme-si-sá 及び eme-te-ná を用いていることが奇異であり，ベルリン語彙等と呼ばれる対照表は若干の語詞のみについての，或る個人の恣意的な分類ではなかったかという疑を容れざるを得ないのである。

従って，われわれがシュメール語の“方言”或いは“位相語”を問題にする場合には，eme-KU と eme-sal 以外に言語学的根拠を有しないことは明らかである。本稿でエメ・サルのみを攻究の対象に選んだ理由の一つである。

II
本　　論

A) Eme-KU と Eme-sal の比較研究

I) Eme-sal 研究資料の所在

エメ・サル研究資料は eme-KU の研究資料に比して遙かに少いとは言え，その数は

決して悲観する程ではない。

i) 第一資料——：この資料にはバビロニア人が，エメ・サルとして明記しているものが属する。もっとも主要なるものは，バビロニア人が作成したと考えられる Eme-KU と eme-sal の対応表で，一般に Eme-sal Vocabulary Tablet と呼ばれているものである。この資料は，MSL (=*Materialien zum Sumerischen Lexikon*, Roma) Vol. IV, p. 1-44 に Eme-sal-Vocabulary Tablet I-III として紹介されている。これらの Tablet, 特に Tablet II の復元には未公刊の資料が利用されているが，全体に楔形文字の転写はなく，翻字のみが紹介されているに過ぎないので，重要箇所及び疑問箇所に就いては他の翻字（及び楔形文字手写テキスト）と比較検討して依用することにした。

Tablet I は神名対応表 (dimmer-dingir-*ilum*) であって，この tablet は A. Deimel, *Šumerische Grammatik* (1939), p. 42-45 (=§12, 1) に II R (=Rawlinson : *The cuneiform inscriptions of Western Asia* Vol. II) pl. 59 (K. 171) からの翻字が提示されている。

Tablet II は，一部を除いて未公開の新資料であり，[mu]-[giš]-[*šamû*] に始まり，me-ri-[gìr]-[*še-e-pu*] に終る約197行に近い語詞対応表であるが，楔形文字資料には今のところ接見の見込みは立たない。

Tablet III は，II 同様約177行の語詞対応表で，この楔形文字テキストに就いては Delitzsch, *Assyrische Lesestücke* (3. Auflage) 及び VR pls. 11-12 の利用が可能で，翻字については Deimel, op. cit, p. 45-48 を参照することが出来る。

この資料に準ずるものでは，断片的ながら，Syllabary 及び先述のベルリン語彙の一部がある。Syllabary 中に散在するエメ・サル語としては，僅少ながら次の資料を指摘することが出来る。

AS. No. 7 (=Richard T. Hallok : *The Chicago Syllabary and the Louvre Syllabary* Ao 7661)

1) (=Chicago Syllabary p. 22).

188) 1, i-is | GIS | g[i]-šu | *i-ṣu*

190) 1, gi-eš | GIŠ | 〃 | *i-ṣu*

191) 1, mu-u | GIŠ | 〃 | 〃 eme-sal

2) (=AS. vol. I, No.1, Meissner, op. cit. p. 78)

7) lú | *a-mi-lu*

8) mu-lu | MIN eme-sal-la

3) (ibid. p. 80=Col. II, 11–13)

11) labar | sukkal eme-sal-la

12) (la-ga-ar) lagar | MIN

13) li. bi. ir | MIN

この他 CT. XII. (pl. 1, II, 11 ; pl. 4, 11 ; pl. 12, VIII, 11–19 ; pl. 33, I, 4–8 ; pl. 33, II, 21 f. ; pl. 34, I, 13 f ; pl. 35, I, 13 ; pl. 40, II ; pl. 41, I. 36–44), CT. XIX (pl. 17, IV, 15–19 ; pl.34, II, 9 ; pl.44, 13) などにも認められる。

Syllabary で注意すべき点は，eme-sal (または他の eme) 語でありながら特に eme-sal と傍記されていない例が散見することで，このような場合は一応第二資料として取扱いに慎重を要するが，次のような場合には Eme-sal-Vocabulary Tablet など第一資料から確認されるので問題はない。たとえば：

AS. vol.I, 1, p. 79

42) nin | *šar-ra-tum*

43) gašan | *šar-ra-tum*

44) ga-ša-an | *šar-ra-tum*

45) un-gal | *šar-ra-tum*

この例で gašan=ga-ša-an が Eme-KU の nin に対する eme-sal 形であることは Eme-sal Vocabulary Tablet II 74)–77) etc. から確認される：

74) ga-ša-an | nin | [*be-el-tu*]

75) GAŠAN | nin | ["]

76) gašan-dìm-me-ir | nin-dingir | *ug*[*-bab-tu*]

77) gašan-dìm-me-ir | nin-dingir | *xy*[*z*]

ii) 第二資料——：これに属する資料は主として宗教文学関係，特に Ér-šèm-ma テキストに見出されるが，その他の文学テキスト，例えば Epic, Myth, Proverb などにもエメ・サル資料は見出される。

本稿では下記の Eme-sal Text を参照した。

1) CT. XV, pls. 7–30.

pl. 18 に就いては A. Deimel, SG, の Übung 49 (p. 251–255) に翻字，翻訳があり，S. Langdon, *Sumerian and Babylonian Psalms*, 1909 にも大部分の翻字，翻訳がある。

2) CT. XLII, pls. 14–17 ; pls. 24–25 ; pls. 26–27 ; pls. 30–31 ; pl. 32 ; pl. 33 ; pl. 34 ; pl. 37 ; pl. 39 ; pl. 44 ; pl. 45 ; pl. 50.

3) TC. XV. pls. 1–2 ; 3 ; 4 ; 5 ; 7–8 ; 43–46 ; 47–48 ; 49–52 ; 68 ; 71 a ; 79.

4) TC. XVI. pls. 82–97 ; 98 ; 131–132 ; 133–134 ; 135–136 ; 142, b ; 143, a ; 144 ; 168–169.

5) S. Langdon, op. cit. には CT. XV 及び Reisner, *Sumerisch-Babylonische Hymnen* からの翻字，翻訳が収められている。

6) Gordon, *Sumerian Proverbs*, 1959.

Collection 1 : 125, 144, 150, 163, 165, 169, 172, 176, 177, 178, 187, 188, 190, 192, 195, 202.

Collection 2 : 99, 100, 101, 103.

7) Journal of Cuneiform Studies, vol. IV, No. 4 ; vol. V, No. 1

S. N. Kramer : *Inanna's Descent to the Nether World.*

8) ZA vol. 37 (NF. 3) 1926–27.

A. Poebel, *Sumerische Untersuchungen* II, V) Der Emesal Text, Ao 4331+4335 vs. 2–5.

9) ZA vol. 45, 1939, p. 175–178.

A. Falkenstein, *Untersuchungen zur Sum. Gram.* 4) SK 2 II 38–III 7 (=A) =V. Scheil, RA VIII 161 ff. 71–87 (=B)

10) Babyloniaca, tome 3 〔1910〕, p. 241–249 (pl. XV, XVI) =St. Langdon, *A fragment of a nippurian liturgy.*

この他断片的ではあるが，SRT No. 18 (cf. RS. 24) 及び David W. Myhrman, *Babylonian Hymns and Prayers*, 1961 の No. 8. にも見出される。

エメ・サルに関する叙説が多少とも見られる参考文献には下記のものがある：

E. Delitzsch : *Sumerisches Glossar*, Leipzig, 1914.

A. Deimel : *Šumerische Grammatik*, Roma, 1939.

——— : *Šumerisches Lexikon*.

R. Jestin : *Abrégé de grammaire Sumérienne*, Paris, 1961, p. 43.

A. Falkenstein : *Das Sumerische*, Leiden, 1959, p. 15, p. 17–18 (=§4), p. 30–31.

Van Dijk : *La sagesse Suméro-Accadienne*, Leiden, 1953, p. 89.

A. Poebel : *Sumerische Studien* (=MVAG, 1921).

なおこの他にも

S. N. Kramer : *Sumerian Mythology*, p. 31–32.

A. Falkenstein : SAHG. p. 28–29.

G. Dossin : *Le Sumérien, langue savante et religieuse*, (p. 514–525).

第二資料の Eme-sal Text で留意しなければならないことは，この種のテキストが，すべて Eme-sal 形をもって誌されているとは限らないことである。すなわち Eme-KU に対応する Eme-sal 語が知られている場合でも，eme-sal で書かずに，eme-KU の語詞が使用されている場合が多いので，これらは勿論，読む場合 eme-sal 風に読まれたものと考えられる。次にその一例を示して見よう。

CT. XV. pl. 10

Obverse. 10) dam-gàr-ra-ki-dagal-ra

12) ga-nunuz-àm da-ma-al-la

14) ki-nad-a-ni á-ág-e gal-la

1) še-er-ma-al

2) še-er-ma-al

Reverse. 2) ša-mu-e-da-gál

3) ša-mu-e-da-gál

4) šibir-dingir-re-ne

上例で，dagal は eme-KU 形であり，この eme-sal の対応形は 12) da-ma-al (-la) である。また še-er-ma-al は eme-KU, nir-gál の対応形であるが，2)，3) の gál は eme-sal 形 (ma-al) で書かれていないし，dingir もそのエメ・サル形で示されていない。この事情は他のエメ・サル・テキストに於いても同様であって，この事実は，eme-sal テキストの作成者が，当然のことながら eme-KU をも知悉していたことを示唆しているのであろうし，このことから Syllabary で時として eme-sal 語にエメ・サルと傍記することが忘れられている事情がよく首肯出来る。

II) Eme-KU と Eme-sal の子音対応

以上の資料を使用して，eme-KU と eme-sal の音韻の対応関係を，子音の対応，母音の対応の順を追って述べて行きたいと思う。なお Eme-sal-Vocabulary Tablet, **I–III** はそれぞれ I–III の略称をもって代える。

1) Eme-KU : d —— Eme-sal : d, z

(i)	E.-K. dingir	: E-s. dìm-me-er		"神"
(ii)	E.-K. numdum	: E-s. šu-um-du-um		"唇"
(iii)	E.-K. ad-gar	: E.-s. ad-mar		"道"
Initial position				
(iv)	E.-K. dùg	: E.-s. zé-eb		"良い"
(v)	E.-K. dugud	: E.-s. zé-bé-da		"重い"
Medial position				
(vi)	E.-K. udu	: E.-s. e-zé		"羊"

註)

(iv)— : I, 12 ([^{d}·Umun–šà-a]b–zé–ib/^{d}·en–šà–dùg] ; I, 96 (^{d}·ma–zé–ib–zib/^{d}·ga–[tùm]–dùg) ; II, 176 (u_5–zé–ib/i-dùg–ga) ; III, 16 (zé–ib/dùg) ; III, 125 etc.

(v)— : II, 22.

(vi)— : II, 89 & 90 ; ŠL. 308, 68.

なおこの他に E.-K. dím : E.-s. zé-èm ((造る)) を挙げることが出来る：Landsberger は III 75 に於いて，eme-sal 形 di-èm を示しているに過ぎないが，VR. pl. 11, Ob. Col. II. 32 には明白に zé-èm が記されている。di-èm の表記も恐らくは "zem" の表記を示したものと考えられる。この例に関連して問題になるのは，E.-K. dumu : E.-s. ṭu-mu (CT. XV. pl. 28, 13 ; II, 69, etc.) "息子" の対応例である。この一例のみを以て，エメ・サルに音韻 /ṭ/ を措定することは適切でないからこの場合にも ṭu-mu は "zumu" の表記を意図したものと考えたいが，本稿では疑問として保留しておく。

なお考えられる対応例は E.-K. ki-in-du : E.-s. ki-en-ga である：

III. 63). ki-en-ga-ág(!) | [ki]-ág | *ra-a-mu*.

この対応例で [ki]=ki-en-ga と仮定すれば CT. XVI, 12, i, 22-23 (Poebel, AJSL, L, p. 163 参照) に見える ki-in-du=*erṣetum* との比接の可能性は充分にある (後説)。〔註 終〕

2) Eme-KU : t——Eme-sal : t, z

(i)	E.-K. tu	: E.-s. te		"鳩"
(ii)	E.-K. èn-tar	: E.-s. [aš]-tar		"番をする"
(iii)	E.-K. geštin	: E.-s. mu-tin/mu-ti		"葡萄酒"。

Initial position

(iv)	E.-K. túm	: E.-s. zé-èm		"持ち来る",
(v)	E.-K. tùm	: E.-s. zé-eb		"持ち来る",
(vi)	E.-K. tuḫ-tuḫ	: E.-s. zé-zé		"開く"。

註)

(iv)— : III 74 (ír-ba-an-zé-èm/ír-ba-an-túm)。たゞし，この用例の場合には zé-èm/túm よりむしろ zé-èm/sum を措定するのが正しいかも知れない。次の例を比較せよ：

III 5) E.-s. ga (?) | E.-K túm

6) E.-s. ir | E.-K. túm etc.

III 118) E.-s. zé-èm | E.-K. ⌈sum⌉ | *na-da-nu*.

(v)— : I, 96 (^{d}Ma-zé-ib-zib/^{d}Gá-[tùm]-dùg)

(vi)— : III, 112 (zé-zé/tu[ḫ-tuḫ] ; ibid. 113 (i-bí-zé-zé/igi-t[uḫ-tuḫ] ; ibid. 111 (zé-ib/tu[ḫ]). LandsbergerはKBo 1, 39 : 18 : lú-igi-tuḫ-tuḫ=lu-i-ki-tu-uḫ-tu-uḫ=*ṣú-uḫ-ḫ*[*u*-

[*tu*] から tuḫ を復原したのであるが，Boğazköy テキストで有声破裂音が無声破裂音で表記される場合の多いことは igi に対する i-ki に徴するまでもなく周知の事実であり，この箇所はむしろ duḫ 或いは du_8 を措定するのが適当かと思われるが，Landsberger に従っておいた。duḫ がウル第三王朝時代の経済文書で dù の代用として用いられる事実から推して，du_8 或いは duḫ の可能性の方が高いであろう。〔註 終〕

3) Eme-KU : g——Eme-sal : g, b, d

従来一様に /g/ をもって表記されて来た音韻を語末に持つ語詞に，母音 /a/ の文法要素が附加される場合，phonetic complement と共に -gá 或いは -ga の二文字が使用されてきた。ところがこの文字と，この文字が添加される語詞との間には一定の関係があって，或る語詞群には常に -ga が，また他の語詞群には常に -gá が使用されていることは明らかで，この関係に就いてはA. Poebel 教授がすでに ZA vol. 37 (NF. III, 1926–27, p.166) に於いて指摘しておられる通りである。それに従ってこの両語群を挙示すれば：

α) 常に -ga が附加される語詞：
dùg, dug_4, gig, gíg, níg, si-ga, sìg, sig_4, sig_5, sì-ga, sig_7, sug, súg, , $šag_4$, $šag_5$, zi-ga ; dirig, kalag, zalag, etc.

β) 常に -gá が添加される語詞：
ág, balag, lag, nag, šèg, ùg, etc.

この後者の接辞（文字）-gá は後説する如く Eme-sal の ma と対応するので，-gá をとる語群を現在では鼻音的 g を有するものとして，ág̃ etc. の如くに表記し，-ga をとる語群は，そのまま dùg etc. と表記する。このような明白な文字の使い分けは，他の接辞文字（lá : la）の間にも認められる。

Initial position, E.-K : g——E.-s. : g

(i)	E.-K. gim	: E.-s. ge-en		"…の如き"
(ii)	E.-K. gam(-gam)	: E.-s. ga(-ga)		"曲げる", "曲がる"

(iii) E.-K. gal : E.-s. gal "大きい"。

Medial position, 1) E.-K. : g——E.-s. : b

(iv) E.-K. dugud : E.-s. zé-bé-da "重い"

(v) E.-K. a-ga : E.-s. a-ba "背"

(vi) E.-K. i-gi : E.-s. i-bí "目"

(vii) E.-K. nimgir : E.-s. li-bi-ir(?) "官職名"

(viii) E.-K. lagar : E.-s. la-bar

註)

(i)— : CT. XV. pl.15, 21 etc. (後説)。

(ii)— : CT. XV. pl. 18, Rs. 10.

(iii)— : passim.

このように語頭では規則的に /g/ をもって対応するが，例外として Verbal preformative ga- が E.-s. の da- 或いは ka- をもって対応する。ka- に就いては ZA 45 (1939) p. 175–178 参照。da- に就いては，Gordon, *Sumerian Proverbs*, p. 135 参照。

(iv)— : /d/ の項に既出。

(v)— : III 72

(vi)— : II. 185 ; Deimel, ŠG. p. 49 はこれを i-ne (? de_3) と解釈し，Delitzsch, Š. *Glossar* p. 18 も i-dè と表記したが，III 185) に見える小字の gloss は be を示しており，上掲の音韻対応より見ても i-bí 或いは i-be_8 が正しいであろう。i-bí-ma-al (CT. XV. pl. 23, Ob. 5) etc.

(vii)— : (n : l) の項参照。

(viii)— : CT. XV. pl. 23, Ob. 6. 〔註 終〕

Medial position, 2) E.-K. : g——E.-s. : d, g

(i) E.-K. a-gàr : E.-s. a-da-ar "地区"

(ii) E.-K. engar : E.-s. mu-un-ga-ar "農夫"

註)

(i)— : Eme-KU の語で gàr をもって表記される一連の語 (dam-gàr etc.) はアッカド語からの借用語である場合が多く，gàr の文字は，アッカド語でも，もっぱら ḳar のために用いられ

るので，a-gàr はむしろ a-kàr を措定すべきかも知れない。III 71。

(ii)—：/ḡ/ の項で詳説する。〔註終〕

Final position, 1) E.-K. g——E.-s. b

(i)	E.-K.	dùg	: E.-s. zé-eb	"良い"
(ii)	E.-K.	sig_4	: E.-s. še-eb	"壁"
(iii)	E.-K.	dug_4	: E.-s. zé-eb	"言う"
(iv)	E.-K.	gig	: E.-s. gib	"小麦"
(v)	E.-K.	$šag_4$	: E.-s. šáb/$šag_4$	"心"
(vi)	E.-K.	ug_5	: E.-s. [ub] (?)	"死ぬ"
(vii)	E.-K.	súg	: E.-s. su-ub (?)	"立つ"
(viii)	E.-K.	sìg	: E.-s. zé-eb	"打つ"

註)

(i)—：/d/ の項参照。

(ii)—：CT. XV. pl. 13, 11(še-eb-é-kur-ra-ta)；ŠL. 367, 220；Del. Š. Gl. p. 261 参照。

(iii)—：CT. XV. pl. 30, Rs. 12 (du_{11}-ba-ni)；ŠL. 15, 36；しかし CT. XV. pl. 10. Ob.4；CT XV. pl. 13, 1～20；pl. 13, 4 (ù-mu-un dug_4-ga-zi-da) etc. に於ける dug_4-ga 参照。CT. XV. pl. 27, 22 & 23：dù。

(iv)—：II. 78 (m[u-g]ib_x/nu-gig)；Witzel, *Auswahl Sumerischer Dichtungen*, 12, mu-gib/nu-gig；なお CT. XV. pl. 7, 19 (gig-ga-bé-eš) 参照。

(v)—：Falkenstein, *Sumerische Beschwörungen aus Boğazköy*, 1, Kol. III, 12 etc. (ša-ab-ba)；

I, 12 ([^{d}· Umun-šà-a]b-zé-ib/^{d}· En-$šag_4$-dùg) ŠL. 384, 8 & 95；Del. ŠGl. p. 255；

(vi)—：

I, 100) ^{d}·Gašan-ti-lu-ba | ^{d}·Nin-tin-ug_5-ga

101) ^{d}·Gašan-ma-ug_5-ga | ^{d}·Nin-gá-ug_5-ga

(vii)—：CT. XV. pl. 11, 6.

(viii) —：ŠL. 147, 33, c：$šag_4$-zé-eb-ba=*ina zu-ru-ub lib-bi*, K 4623 Vs. 12 (ASKT 118) $šag_4$-sìg-ga=*zu-ru-ub lib-bi*, IVR 26, 54, b.〔註終〕

Final position 2) E.-K. : g——E.-s. : g

(i)	E.-K.	sig_9	:	E.-s.	si(-ga)
(ii)	〃	sig_{10}	:	〃	sì(-ga)
(iii)	〃	zig	:	〃	zi(-ga)
(iv)	〃	súg	:	〃	súg
(v)	〃	kug	:	〃	kù(-ga)
(vi)	〃	$šag_5$	:	〃	$ša_6$(-ga)
(vii)	〃	kala(g)	:	〃	kala(g)
(viii)	〃	diri(g)	:	〃	diri(g)

4) Eme-KU : ğ——Eme-sal : m, ğ

Initial position E.-K. : ğ——E.-s. : m

(i)	E.-K.	gír	:	E.-s.	me-ri	"刀"
(ii)	〃	gá	:	〃	ma	"する"
(iii)	〃	gìr	:	〃	me/i-ri	"足"
(iv)	〃	gar	:	〃	mar	"作る"
(v)	〃	giš	:	〃	mu/mu-uš	"木"
(vi)	〃	gál	:	〃	ma-al	"有る"
(vii)	〃	garza	:	〃	mar-za	"聖式"
(viii)	〃	geštu(g)	:	〃	mu-uš-túg	"耳"
(ix)	〃	geštin	:	〃	mu-ti(n)	"葡萄酒"
(x)	〃	gidri	:	〃	mu-du-ru	"王笏"
(xi)	〃	gíg, ge_6	:	〃	me	"黒い"

註)

(i)— : II, 97([mi–ri–tab]/[gír–]tab) ; II, 180([m]e–ri/gír], ŠL. 532, 69, f. ;

(ii)— : passim. (III. 76)

(iii)— : II 197(me–ri/[gìr]) ; Del. Š. Gl. p. 91 f. ; ŠL. 532, 69, g ; cf. I, 104(^{d}·Gašan–gìr–da/^{d}·Nin–gìr–da)

(iv)— : passim. (III. 78)

(v)— : passim. (II. 154/III 58 etc.)

(vi)— : passim. (CT. XV. pl. 10, 11 ; III 77)

(vii)— : III. 81 ;

(viii)— : II. 183.

(ix)— : II. 126, etc.

(x)— : CT. XV. pl. 17,18 ; Del. Š.Gl. p. 95～ ; ŠL. 61, 106.

(xi)— : CT. XV. pl. 26, 12 : dam-til-la dumu-til-la na-nam me-sag-e na-ù-tu に於ける me-sag は sag-gíg に対応するか？〔註終〕

Medial position. E.-K. : g̃ —— E.-s. : m

(i)	E.-K.	dingir	:	E.-s.	dìm-me-er	"神"
(ii)	〃	ingar	:	〃	á-mar	"像"
(iii)	〃	dagal	:	〃	da-ma-al	"広い"

E. Sollberger はその著 *Le Système verbal dans les inscriptions《royales》présargoniques de Lagaš*. 1952, p.17–18 で，次のような見解を述べている（大意）：

"Syllabary の音節表記 en-ga-ar によって伝えられている engar《cultivateur》に含まれる -n- は単に後続する音韻［g̃］の鼻音性（nasalité）を表示しているに過ぎないという可能性が考えられる。もし然りとすれば，engar は e-g̃ar《(灌漑用の）運河を作る（人）》と分析出来，engar の意味ともよく調和する。もっとも 'n+子音' に於いて n が先行する母音の nasalisation を表示している可能性も考えられる。従ってその場合には：voyelle nasale（例えば，ã）+Consonne であって，—a+n+Consonne ではない。"

要するに Sollberger 氏は "母音+n+子音" の表記を "鼻音化母音+子音" 或いは "母音+鼻音化子音" のいずれかに理解しようとするのである。しかし，シュメール語には —n，—m に終る語は多く在証されるし，それと合成語を作る語も考えられる以上，一元的なこのような考え方には当然矛盾がある。特に Sollberger 氏が例として分析を加えている engar は，e-g̃ar でもなく ẽ-gar でもないことは，次の例を見れば明らかである。

II. 15) [x-g]a-ar | APIN^{en-gar}

16) [mu-u]n-ga-ar | APIN^{MIN}

mu-un-gar/gàr (*Lamentation over the destruction of Ur*[=As. 12]271) 及び mu-un-gàr

(SRT. 3, i, 25 f ; RA 33, 106 : 34)。すなわち eme-KU medial/ğ/ は eme-sal では規則的に /m/ に移行しているのに，eme-sal 形はmun-gar であって，engar のgが /ğ/ でないことを示しているし，en : mun も，次の例に見るように， en : umun に由来することは疑を容れない。

Ⅰ. 2) ^{d}·Umun-ki | ^{d}·En-ki

4) ^{d}·Mu-ul-líl | ^{d}·En-líl-lá

Ⅱ. 26) m[u-u]n-kud | ZAG^{e}]$^{n-ku}$ḪA]

(上例で，^{d}·Mu-ul-líl<*Mu-un-líl, mu-un-kud<*umun-kud を措定できる。) Ⅱ, 26) の一部は欠けているけれども eme-sal 形の mu-un-kud については AS 12(=op. cit.) 270 及び VAS. 10, 199, iv 19, 20 の mu-un-kud ab-ba-ka によって裏付けられ， eme-KU 形の en-ku(d)=ZAG-ḪA=[*m*]*a*-[*k*]*i*-[*su*] は未公刊の BM 98735+BM 98904, i. 5 によって検証される。

つまり engar に於ける en は，eme-KU に於いて“主”を意味する en と同一語なのであって，Sollberger 氏の解釈には左袒出来ない。

註)

(i)— : passim

(ii)— : III 93 & 94.

(iii)— : passim. 〔註終〕

Final position. Eme-KU : ğ —— Eme-sal : ğ

(i) E.-K. sag : E.-s. sag

(ii) 〃 ág : 〃 ág

(iii) 〃 nag : 〃 nag etc.

註)

(i)— : I. 33(^{d}·[Gašа]n-ḫur-sag-gá/^{d}·Nin-ḫur-sag-gá) ; CT. XV. pl. 11, Ob. 3 (ù-tu-ud-da ḫur-sag-gá ù-mu-un-e é-ninnu) ; たゞし II 81, (še-en/sag/*ḳaḳ*[-*ḳa-du*]) 参照。

(ii)— : I. 16(^{d}·Gašan-ki-ág-nun-na/^{d}·Nin-ki-ág-nun-na) etc.

(iii)— : CT. XV. pl. 12, Rs. 1 ; ibid. pl. 28, 14. 〔註終〕

5) Eme-KU : k——Eme-sal : k(, g)

k : k の対応は規則的であるが，ただ E.-K. ki は eme-sal で gi に移行していたらしいことは次の諸例から推察することが出来る。

(i)	E.-K.	ki-ug$_5$-ga	:	E.-s.	gi-ug$_5$-ga
(ii)	〃	ki-gub	:	〃	gi-gu-úb
(iii)	〃	ki-dúr	:	〃	gi-dur$_5$
(iv)	〃	kú	:	〃	gu$_7$
(v)	〃	lú-kin-gi$_4$-a	:	〃	lú-giš-gi

註)

(i)— : Studia Orientalia, V, 4 p. 6, p. 19 & p. 36 (=K. Tallqvist : *Sumerisch-Akkadische Namen der Totenwelt*).

(ii)— : Van Dijk, *La Sagesse Suméro-Accadienne*,

p. 90. I. é káš-gál-la gi-dur$_5$-su$_6$-bi-im

é káš-gál-la gi-gu-úb-bi-im

bît ši-ka-ru i-ba-aš-šu-ú ma-zal-lu-ša

この箇所を Van Dijk 氏は，

Sum. "*La maison, où il y a de la bière—de son, roseau à boire*(?)"

Acc. "*La maison, où il y a de la bière—de son poste*(?)"

と訳して，gi- を文字通り"葦"と理解されたが，これには同意出来ない。その理由として A. Deimel, *Akkadisch-Šumerisches Glossar*, p. 247 の下記の項を指摘したい：

§ *mazallu* : =gi-nam-SIBA-da=*ma-zal-lu ša* $^{am\hat{e}l}$*rê'i*, *Hirtenhütte*(?), 85, 174.

§ *mazaltu*(*nihtu*), (ruhige) Stätte : =im-gub-ba, 399, 119.

上例で，gi-nam-SIBA-da はもちろん gi-nam-sipad-da であり，su$_6$=súb は sipad のエメ・サル形である。ここでは意味の上からも，形態面からも gi-dur$_5$=ki-dúr, gi-gu-úb=ki-gub-ba と対比されるべきである。なお AS. No.7, p. 18 の下記を参照。

92) ki-⌜i⌝ | KI | *ki-ku-u* | *ir-ṣi-tum*

93) ku-ú | KI | 〃 | 〃

94) gu-u | KI | 〃 | ⌜*ma-a*⌝*-tum*

95) gi-e | KI | 〃 | *šá* KI-n[e *ki-nu-*]*nu*

(iv)——: II, 90 (⌜e-zé-èm-gu$_7$-a/udu-še), このエメ・サルの欄は，*udu-níg-kú-a と復原される形で，kú が gu$_7$ と読まるべき可能性に就いては，Landsberger が Proto-

ea 690 : ni-ga-a/-an＝ŠE を指摘しておられる。従って níg-kú-a>èm-gu$_7$-a>èm-ga-a の推移過程を措定出来るが，ni-ga-a が ní-ga-a であって，èm-ga-a でないところに疑問は残る。なお CT. XV. pl. 25, Rs. 27, mu-ka-e (/mu-un-kú-e) 参照。

(v)——:(n :š) の項参照。〔註終〕

6) Eme-KU : b —— Eme-sal : b

7) Eme-KU : p —— Eme-sal : p

8) Eme-KU : s —— Eme-sal : s, z

(i)	E.-K.	sipa(d)	:	E.-s.	súb	"牧者"
(ii)	〃	súg	:	〃	súg, súb	"立つ"
(iii)	〃	sig$_4$	:	〃	še-eb	"壁"

Initial position.

(iv)	E.-K.	sum	:	E.-s.	zé-èg̃
(v)	〃	sír	:	〃	zé-er
	〃	mu-sír	:	〃	me-zé-er
	〃	⌜d·⌝Sír-du	:	〃	d·Zé-er-tur

註)

(i)— : II 12([súb]-ba/PA+⌜LU⌝/*ri-ia*[-*ú-um*]) では [súb] の欄が破損していて不明であるが，Landsberger は Del. Š.Gl. 248 及び lú-šúb-ba, SRT 3, i, 15, 20 ; ii 12, から [súb] を復原している。この他にも (k : g) の註 (ii) や，CT. XV. pl. 18, Ob. 9 (súb-ba en d·Dumu-zi) ; ib. 10 (dul-súb-ba-ka(?) cf. Studia Orientalia, V, 4, p. 35) ; CT. XV. pl. 19, 3 (súb-ba en d·Dumu-zi) ; JCS, vol. IV, No. 4, 69 & 74 を指摘出来る。

(ii)— : CT. XV. pl. 16, 25 (ḫé-en-súg-súg-ge-eš); CT. XV. pl. 11, Ob. 6, su-ub-bu.

(iii)— : (g : b) の項参照。CT. XV. pl.13, 11, & 19, 20。なお JCS, vol. IV, No. 4, 45。

(iv)— : III. 18 ; JCS. vol. IV, No. 4, 44, 53 & 60. ; ŠL. 147, 22.

(v)— : III. 109. (zé-[i]r/B[U]=sír), III 92 (me-zé-ir/MU. BU=mu-sír)。Landsberger は BU を sír と理解しない。(III 92 に対する脚註参照。) なお Gordon, *Sumerian*

Proverbs, p. 134–135 fn. 13 参照。〔註終〕

9) Eme-KU: š —— Eme-sal : š(, z)

(i) E.-K. $šag_4$: E.-s. ša-ab
(ii) 〃 giš : 〃 mu / mu-uš

(iii) E.-K. šub : E.-s. zu-ub (?)

註)
(i)— : (g : b) に既出。
(ii)— : II 154–156 など参照。
154) mu–uš–ki–in–ti | giš-kin–ti
155) mu-uš-u_5 | giš–⌈u_5⌉
156) mu–uš-u_5 | g[iš-u_5]
(iii)— : ŠL. 399, 31 (^{lú}ní–zu–ub), b)=*ṣabbu*, e. (untergebener) Soldat, これを ní–šub に由来するものと仮定すれば šub–lugal の意味がよく理解出来る。しかし他にこの対応例は在証されないので，š/z は除外すべきかも知れない。〔註終〕

10) Eme-KU : z —— Eme-sal :z, š

恐らく偶発的な対応として z : š が指摘出来る：
(i) E.-K. izi : E.-s. še "火",
(ii) 〃 zi : 〃 ši/si "生命，息",
(iii) 〃 zi-in-gi : 〃 ši-in-gi "脾"。

註)
(i)— : III 99.
(ii)— : II 189 ($ši^{si-i}$/zi) ; ŠL. 449, 18 ; Del. Š.Gl. p. 222–223.
(iii)— : II 196 (ši–in–g[i]/[zi-i]n–gi) 〔註終〕

11) Eme-KU : ḫ —— Eme-sal : ḫ

なお，次の一例参照。

(i) E.-K. du[ḫ] : E.-s. zé-ib

I. 111 (zé-ib/ du[ḫ])

12) Eme-KU : n —— Eme-sal : n, š, t, etc.

α)	(i)	E.-K.	nu-ub-du$_7$	: E.-s.	nu-ga	" ? ",
	(ii)	〃	mu-uš-ki-in-ti	: 〃	giš-kin-ti	"職人",
	(iii)	〃	giš-tùn	: 〃	[mu]-tùn	"小容器"。
β)	(i)	E.-K.	nir	: E.-s.	še-er	"貴族，王子",
		〃	nir-gál	: 〃	še-er-ma-al	" 〃 , 〃 ",
		〃	a-nir	: 〃	a-še-er	"悲歎",
		〃	pap-ne[r]	: 〃	pap-še-ir	"紐",
	(ii)	〃	numdum	: 〃	šu-um-du-um	"唇",
	(iii)	〃	èn～tar	: 〃	aš～tar	"番をする",
	(iv)	〃	nin	: 〃	še-im (=šem)	"女主",
		〃	nin	: 〃	gašan	
		〃	^{d}·Nin-kul-kul	: 〃	^{d}·Šen-kul-kul	"神名",
		〃	^{d}·Nin-tu	: 〃	[^{d}·Še]-en-tu	"神名",
	(v)	〃	nimur (?)	: 〃	še-mur	"灰",
	(vi)	〃	lú-kin-gi$_4$-a	: 〃	lú-giš-gi (?)	"使者",
	(vii)	〃	^{d}·Niraḫ	: 〃	^{d}·Še-ra-aḫ	"神名"。
γ)	(i)	E.-K.	a-na(-a)	: E.-s.	(a-)ta, ta(-a)	"何を",
	(ii)	〃	e-ne-(àm)	: 〃	te(-àm)	"何を",
	(iii)	〃	nam-mu	: 〃	te-àm	"それは何？"。
δ)	(i)	E.-K.	nu-gig	: E.-s.	mu-gib	"Hierodule",
	(ii)	〃	nimgir	: 〃	li-bi-ir (?)	"官職名",

(iii) 〃 erìn : 〃 erìm

註)

α) (i)— : III. 14 ; Deimel, ŠG. nu-ub-ul / nu-ga.

(ii)— : II. 154.

(iii)— : II. 146.

β) (i)— : II. 20. ; ASKT. 185, 9 ; še-er-ma-al : II. 21 ; a-še-er : Studia Orientalia, V, 4, p.17. (kur a-še-er-ra-ke$_4$/*ir-ṣi-tim ta-ni-ḫi* "Land der Wehklage"=K 3479, 21/22=BA V 674. SK 26, IV 29. VII 12. Vgl. BE XXX (1) p.44 Anm. 5) ; III, 73 ; cf. II 88 ([še-ir-nu-ma-al]/ner-nu-gál). pap-še-er : II, 166.

(ii)— : II. 187 ; SRT. 31, 24 ; Radau, HAV 3, 22 ; ŠL. 354, 188.

(iii)— : III 149-150 ; Landsberger は Falkenstein : aš na-ma-ta-re, VAS 2, 94, 66 の aš-tar と èn-tar との比接を試みている。

(iv)— : Eme-KU の nin は eme-sal の nin, šen, šem, gašan に対応する。 šen/šem に見られる n/m の浮動は, Eme-KU でも, 特にイシン・ラルサ王朝期に, 顕著であったが, 同様な浮動性がエメ・サルにも存在したことが知られる。gašan : nin に就いては, 筆者は *ga-nin>*ga-šen>*ga-šan の推移を措定し, 同様な過程を *ga-mí>ge-me, *ǧa-lú>*ma-lu>mu-lu に想定する。 シュメール語には名詞に対する接頭辞は在証されないので, 女性語に対する*ga-, 男性語に対する *ǧa- も元来は何等かの意味を有する名詞であったかも知れない。mu-lu に就いては giš=giš : mu(š) との合成語の可能性も考えてよい。
še-im : II 70 (še-im/[nin]) ; ^{d}·šen-kul-kul : I, 25 ; ^{d}·šen-tu : I, 34 & 35 ; ga-ša-an : II 74 & 75.

(v)— : III 100(še-mur/KI[.NE](=nimur).

(vi)— : Falkenstein, *Die neusumerischen Gerichtsurkunden* III. p.135. lú-giš-gi Bote ? : lú-giš-gi-lugala Bote ? des Königs 131, 17(s. Komm. ; unsichere Gleichsetzung mit lú-kin-gi$_4$-a-lugala Königsbote). この lú-giš-gi-lugala の知られる di-til-la は Šûsîn の時代のものであり, eme-sal と認定するには無理がある。なお, Falkenstein, *Untersuchungen zur Sumerischen Grammatik* (=ZA 45), p.186, 7) (=SK 123 III 16-18) :

17) ki-ga-a guruš-e ama-uga-ni-ir kin mu-un-da-ra-ši-in-gi$_4$

《Durch einen Boten schickt(e) der Jüngling an seine Mutter, die ihn geboren hat, —》

この 16) 行には guruš-eden-zé-ba, すなわち guruš-edin-dùg-ga の eme-sal 形が見え

る。上例で kin–gi$_4$–a>ki–ga–a の移行は疑問の余地はない。

(vii)— : I, 19。この例はこの項目よりも，むしろ nir/šer の項に加えるべきものかも知れない。

γ) (i)— : III. 151–153.

151) [t]a | a–na | [*mi–nu*]

152) ta | a–na | ? [??]

153) ta–àm | a–na–àm | *m*[*i–nu*].

なお，VAT 9528 (未公刊) には下記の例があるらしい：

i 17) ta | *mi–nu*

18) ta–àm | *mi–nu*

19) a–na | *mi–nu*

20) e–ne–àm | *mi–nu*

21) nam–mu | *mi–nu–šu*.

17), 18) にはeme–sal(–la) の傍記がないが，この二語が eme–sal であることは言うまでもない。

Gordon, *Sum. Proverbs*, 1. 190 (ta–àm), 1. 165 (ta), 1. 169 (ta) ; JCS, vol. IV, No. 4, 44, 53 & 60. (ta–gim) etc.

(ii)— : III. 154.

(iii)— : III. 156.

δ) (i)— : II. 78–79, (gib) の (iv) 参照。

(ii)— : n/l の交替は Eme–KU に於いても *nu–ba–>la–ba–, *nu–bí–>li–bí– として知られるし，Deimel 教授も Studia Orientalia XIII, 6, *Zur Etymologie der Namen der Körperteile* p. 9 & p. 15 に於いて dun=dul, šudun=šudul, tin=til その他の例を指摘しておられる通りである。

(iii)— : CT. XV. pl. 26, 11(erìm–ma–bi).〔註終〕

13) Eme-KU : m —— Eme-sal : m, ğ, (n)

α)	(i)	E.-K.	túm	:	E.-s. zé-èm (?)	“持って来る”,
	(ii)	〃	sum	:	〃 zé-èm (?)	“与える”,
	(iii)	〃	inim/enim	:	〃 e-ne-èm (?)	“言葉”,
	(iv)	〃	numdum	:	〃 šu-um-du-um	“唇”。

β)	(i)	E.-K.	nam	: E.-s. na-ág̃	"運命 etc.",
	(ii)	〃	kalam	: 〃 ka-na-ág̃	"国土",
	(iii)	〃	níg	: 〃 ág̃ (?)	

γ)	(i)	E.-K.	gim	: E.-s. gin_x(=gi_{18}), ge-en
	(ii)	〃	gìm	: 〃 gi_4-in

註)

α) (iii)— : β) の項の註記参照。

β) nam, kalam(/kanam) に対する eme-sal 形, na-ÁG, ka-na-ÁG etc. に見える ÁG を Landsberger は ám と表記し, Deimel は ág(?) と疑問をのこした。この両見解のうち, 先ず Landsberger の所説を吟味して見よう。

III. 52-57.

52)	na-ÁG	nam	*ši-im-tum*
53)	na-ÁG-tar	nam-tar	*ši-im-tum*
54)	na-ÁG-tag-ga	nam-tag-ga	*ár-nu*
55)	na-ÁG-[umun]	nam-lugal	**šar-*ru-tum*
56)	na-ÁG-[gašan]	nam-nin	*be-lu-tum*
57)	na-ÁG-g[il]-li-[ìm]	nam-gilim	*ša-aḫ-lu-uḳ-tum.*

上記の対応表で, もし Eme-KU 形と Eme-sal 形とが同一であるならば, この対応表の少くとも 52)-54) は書かれなかったであろうことは, ア・プリオリに推断することが出来る。つまり na-ÁG が na-ám と読まれて na-ám=nam ならば, この表の上部は意味をなさない。それかと言って, mに音韻として二種類認めることも今のところ, 他に左証がない。また単に単母音：長母音の差違 ([nam] : [na:m]) を表記したものとも考えられない。それならば "na-a-am" が期待されるからである。

他の疑問は, ág̃. が他の sag̃, nag̃ など /g̃/ を語末に有する語と等しく, eme-sal ではそのまま残存したことは既に述べた通りであり, エメ・サルに於いて ÁG が ám の音価を有したことは蓋然性に乏しいということである。実際 Syllabary にも ám の音価は知られていない (エメ・サルに於いて, ág-gá が ám-mà と読まれた可能性は, Eme-KU, gá が eme-sal で ma と書かれている事実から推して考え難い)。

第三の疑問は, ka-na-ÁG に対して文法要素 -a が附加されるとき -gá をもって表記されている事実が存することである。

CT. XV. pl. 13, 5

5) ^{d}·Mu-ul-líl a-a ka-na-ág-gá

CT. XV. pl. 18.

14)——ka-na-ág-gá

15) [ù-m]u-un GÍ[R ?]-ka-na-ág-gá

/CT. XV. pl. 28, Ob. 18

18) é-tùr-kalam-ma-ke$_4$

I, 16

16) ^{d}·Gašan-ki-ág-nun-na | ^{d}·Nin-ki-ág-nun-na

また Deimel, ŠG. p.35 に依れば, Del. Š.Gr. §55, 6) は ASKT. 129, 23/24 AM$_2$-ga=*a-na-ak* "鉛" の例で，これは本来 niggi/a 或いは nagga (AN-na) と書かれるものであるから，ÁG に nig$_4$ の音価を認めているようである。この ÁM を nig$_4$ と読むか，ág と解釈するかは別として，ここで -ǧá ではなく -ga が用いられていることが重要で，この例は ÁG を ám よりは，むしろ ág と読むべきことを有力に示唆している。

叙上の如き理由から na-ÁG, ka-na-ÁG は，na-ág, ka-na-ág と理解されなければならないことは必然のように思えるが，この立場には次の点で困難がある。

それは，e-ne-èm, zé-èm etc. に於いて，これらの語も，e-ne-èǧ, zé-èǧ etc. と解釈されねばならないのではないかという点である。何故ならば，これらの語も文法要素 a が接辞される場合に -maではなく -gá(=mà) をとっているからである：

CT. XV. pl. 24, 13

13) e-ne-ÁG-gá-ni(=e-ne-èg-gá-ni)

cf. Gordon, *Sum. Proverbs*, 1. 190.

3) ta-àm gi$_4$-in-na ga-an-na-ab-zé-èg-gen

この二番目の例を，Gordon 氏は ga-an-na-ab-zé-èm-DU と読み疑問としているが，本例の Variant では，ga-ma-zé-mà/-gá-e-en-dè-en が見える。従って，上例は

ga-ma-zé-èm-mèn 或いは

ga-ma-zé-èǧ-gen, ga-ma-zé-èǧ-mèn

のいずれかに読まれるべきことは明らかである（本例は誤用ながら一人称単数形。Variant の例は一人称複数形)。この mèn/gen に就いても III. 171-177 の困難な対応例がある：

171)	me	GIN(=mèn) ?	[*m*]*a–ga–ru*
172)	me	GIN(=mèn) ?	[*a*]*–na–ku*
173)	GIN(=mèn ?)	me–en	MIN
174)	GIN(=mèn ?)	me–en	*at–*[*ṭa*]
175)	gá	ma	*i̯a–*[*ši*]
176)	gá–ba–zé–èm	ma–an–sum	*id–di*[*–nam*]
177)	in–ga–da–te	im–ma–da–te	*iḫ–ḫe–*[*ḫa*]*–*[*a*]

173), 174) の第一欄及び 171) 172) の第二欄に見える GIN を Landsberger は mèn と解釈しているのであるが，この場合にも同一の mèn=men を何故わざわざ書き分けたかの理由が理解出来ない。

ところが，177) in–ga–/im–ma– は明白に Eme–sal /g/ : Eme–KU/m/の対立を示している。

以上の諸点に検討を加えるならば，やはり Landsberger, Delitzsch (Š.Gl. p. 197～198) 等の見解には疑義を抱かざるを得ない。

GÁ に就いては，Syllabary で mà : [ma–a] 及び gá : [ga–a] の音価が知られているが，問題はこの文字が接辞として使用される際に，ma と GÁ との間に，–ga/–gá に見られたような，厳密な使い分けが行われていると看做すかどうかという点に絞られる。しかし実際には，使い分けの行われていないとする立場——sag, nag, ág の場合には –gá，すなわち sag–gá, nag–gá, ág–gá であって，ka–na–ÁG, e–ne–ÁG etc. の場合には mà，すなわち ka–na–ám–mà, e–ne–èm–mà であるとする立場——は認め難いので，使い分けが行われていたとする立場のみが残る。この立場から，もし GÁ を mà と解釈するならば，ma/mà の使い分けが行われていたこと，換言すれば /m/ と表記されている文字に，二種の音韻が存在したと提言することになる。一方，GÁ を gá と読むならば，ma/ǧa の対立を表記していることになり，論理的矛盾は存在しない。

γ) (i)—：母音の対応 (i : e) の項参照。

(ii)—：母音の対応 (i : i) の項参照。〔註終〕

14) Eme-KU : r —— Eme-sal : r

(i)	E.-K.	^{giš} gidri	:	E.-s.	mu-du-ru
(ii)	〃	dingir	:	〃	dìm-me-er
(iii)	〃	gar	:	〃	mar
(iv)	〃	nir	:	〃	še-er, etc.

15) Eme-KU : l —— Eme-sal : l

(i)	E.-K.	lagar	:	E.-s.	la-bar
(ii)	〃	^{d}·En-líl	:	〃	^{d}·Mu-ul-líl
(iii)	〃	gál	:	〃	ma-al
(iv)	〃	lú	:	〃	mu-lu

III) Eme-KU と Eme-sal の母音対応

1) Eme-KU : a —— Eme-sal : a (, e)

α)	E.-K.	dagal	:	E.-s.	da-ma-al
	〃	engar	:	〃	mu-un-gar /-gàr
	〃	gar	:	〃	mar
	〃	a-gàr	:	〃	a-da-ar
	〃	a-nir	:	〃	a-še-er
	〃	garza	:	〃	marza
	〃	kalam	:	〃	ka-na-ág
	〃	$šag_4$	:	〃	ša-ab, $šab_4$
	〃	sag	:	〃	sag, (šen), etc.

β)	(i)	E.-K. alim	:	〃	⌜e⌝-lum
	(ii)	〃 sag	:	〃	šen
	(iii)	〃 ná	:	〃	ne

上掲の諸例により容易に察知される如く， eme-KU /a/ と eme-sal /a/ との対応は規則的であり， β) に挙げた例はその例外的なケースに過ぎない。

註)

(i)— : I. 5 (^{d}·E-lum/^{d}·alim). cf. Syllabary, alim : [a-li-im].

(ii)— : II. 181 ; この他では sag : sag の対応を示している (III, 11 ; I. 33 ; I. 83 ; I. 111 ; II. 65, etc.)

(iii)— : CT. XV. pl. 27, 12/CT. XV. pl. 30, 14～. 〔註終〕

2) Eme-KU : i —— Eme-sal : u, e (, i)

α)	(i)	E.-K.	^{giš}gidri	: E.-s.	mu-du-ru
	(ii)	〃	giš	: 〃	mu(-uš)
	(iii)	〃	ì	: 〃	u_5
	(iv)	〃	sipa(d), sib	: 〃	súb
	(v)	〃	alim	: 〃	e-lum
	(vi)	〃	a-gi_6	: 〃	a-gu_4 (?)
	(vii)	〃	imin(?)	: 〃	umun, etc.

β)	(i)	E.-K.	inim	: E.-s.	e-ne-èg
	(ii)	〃	sig_4	: 〃	še-eb
	(iii)	〃	gìr	: 〃	me-ri
	(iv)	〃	gim	: 〃	ge-en
	(v)	〃	nir	: 〃	še-er
	(vi)	〃	dingir	: 〃	dìm-me-er
	(vii)	〃	íd	: 〃	é, ì.
	(viii)	〃	nimur	: 〃	še-mur
	(ix)	〃	nin	: 〃	šen, šem
	(x)	〃	izi	: 〃	še, etc.

γ)	(i)	E.-K.	gìm	: E-.s.	gi_4-in
	(ii)	〃	zi	: 〃	ši, si-i
	(iii)	〃	zi-in-gi	: 〃	ši-in-gi
	(iv)	〃	ki	: 〃	gi
	(v)	〃	igi	: 〃	i-bí, etc.

註)

α) (iii)— : II. 175 ($u_5^{ú}$ /ì), cf. II. 176—178. Cf. Gordon, *Sumerian Proverbs* 1. 190 (uzu-ì al-zé-eb uzu-ì-udu al-z[é]-eb).

(vi)— : Langdon, SBP. p. 334 及び CT. XV. pl. 26, 13 参照。

β) (iv)— : II 167 を Landsberger は,

167) [di-ĕm] | [gim] | [*k*]*i-ma*

と復原しているが，この箇所は筆者の如く，[ge-en]|[gim] と復元すべきことは，次の例より見て明らかである：

CT. XV. pl. 15, 21)—pl. 16. 3)

21) lú dumu-mu ul gin-na gin-na a-ba zi-ge-en te-ba

1) ki-bal ḫul-gig a-a ugùn-zu-šè a-ba za-e-gim te-ba

2) ^{zá}im-tur-tur-e šu um-me-ti a-ba za-e-gim te-ba

3) zá-gal-gal-e šu um-me-ti a-ba za-e-gim te-ba

上例中，各行の末尾に見える a-ba zi-ge-en/za-e-gim te-ba は一種の refrain（拙稿"シュメール詩法(1)"『水門』創刊号，参照）であって，zi-ge-en は za-e-gim《お前のように》の eme-sal 形であり，最初に eme-sal 形を示し，それ以下で eme-KU 形を示すのは eme-sal テキストでよく見受ける表記法である。すなわち za-e-gim>zi-gen を措定出来る。この推移は次の二例からも裏付けられる：

Gordon : *Sumerian Proverbs.*

1.149(=p. 117)

ki-sikil šeš-zu mà-e gi_{18}-nam

šeš mà-gim ḫé-ti-le

1.150 (=p. 117)

mà-a-gi_{18}-nam šim-bi líl-lá-àm

u_5-ni bar-šèg-gá ḫé-kú-e

上例の如き文例に於いては，Gordon, Falkenstein (ZA 49 [1949] pp. 64 f.), Jacobsen (JNES V [1946], p. 133, note 11) は GIM に gi_{18} の音価を与えているが，もちろん ge_{18}=[gen] の音価も可能である。[gin] については MSL III. p. 208 に 530 行への補註として，Lautwert : [g]i-in N ; (gi-im A ; unklar N.) が指摘されている。

なお，1.150 の Variant として èm-mà-a-gi-nam——が指摘されているが，この例に於いても，もちろん ge-nam の解釈が可能である。

γ) (i)— : II. 87([gi_4-in] /GÈM/am-[tu])

Del. Š.Gl. p. 102 ; TRS pl. II(=No. 6), F. 11. ([g]i_4-in agrig é-gi_4-a dumu-é-e-ke_4) ;

Gordon : *Sum. Proverbs*, 1. 190 (gi_4-in-na ; Variant : gi_4-in-e)

母音の対応では，Eme-KU/i/ : Eme-sal/u/ は非常に顕著で，これは後説する Eme-KU/u/ : eme-sal/e/&/i/ と共に eme-sal を特色づける傾向，emesalism である。

Eme-KU/i/ : eme-sal/e/ も一見鮮かな対応を見せているが，Eme-KU の /i/ にはなお疑問を提示したい。

その理由は楔形文字の性質上，ke, se, le, re, etc. 及び em, er, eb, es, ez, eg, eḫ, etc. を表わす固有の文字がなく，これらの音価はそれぞれ，ki, si, li, ri, etc. 及び im, ir, ib, is, iz, ig を表わす文字によって併用されているので，それが /i/ を表記したものか，/e/ が意図されたものか容易には決定出来ないからである。これを上記の対応表に於いて例証して見よう：

(iv) gim : [gi-im]。Syllabary に見えるこの [gi-im] の表記で，gi は普通に ge の表記にも用いられ，また (em の固有の文字がないので) em のためにはこの im の文字が用いられるから，これは，[ge-em] とも理解出来るのである。

(iii) gìr : [gi-ir], gír : [gi-ir] の場合にも，同様に [ge-er] と解釈することが出来る。Eme-KU, šu-diš : Eme-sal, šu-de-eš (CT. XV. pl. 11, 14 etc.) に於ける -diš の場合でも，Syllabary では diš : [di-eš] と書かれていて，この表記法は，[de-eš] 及び [di-iš] の可能性を等分に含んでいるのである。sig_4 : [si-ig], etc. に就いても同じことが言える。

なお注意しなければならないのは，ni, ne, ; mi, me ; ši, še を表わすそれぞれ固有の文字が存在するが，この区別が厳密に行われずに，相互に混用されることがしばしば見られることで，このような混用はアッカド語の表記に於いて特に著しい。一例を挙げれば，*amêlu* は Syllabary で *a-me-lu* (先出のベルリン語彙参照) とも *a-mi-lu* (前出の AS. vol. I, No. 1, p. 78 の例参照) とも書かれている。〔註終〕

3) Eme-KU : u —— Eme-sal : e, i, u

α)	(i)	E.-K.	udu	: E.-s.	e-zé
	(ii)	〃	dùg	: 〃	zé-eb
	(iii)	〃	sum	: 〃	zé-èǧ
	(iv)	〃	mu-sír	: 〃	me-zé-er
	(v)	〃	tu	: 〃	te
	(vi)	〃	dugud	: 〃	zé-bi-da, etc.

β)	(i)	E.-K.	^{d}·[Nin-gír-s]u	: E.-s.	^{d}·Umun-me-ir-si, etc.
γ)	(i)	E.-K.	gú-gar	: 〃	gú-mar
	(ii)	〃	kur-é-gar$_8$	: 〃	kur-á-mar
	(iii)	〃	lú	: 〃	mu-lu, etc.

註)

α) (iii)— : A. Poebel はその論文 *The Root si(m) and su$_{11}$(m), "to give" in Sumerian* (=JAOS, vol. 57 [1937]. p. 35–72) に於いて，sum の古形として si(m) を措定し，Falkenstein その他の賛同を得ているのであるが，筆者はその推論の過程に疑問を抱いているので，こゝでは採り上げない。

(vi)— : または zé–bé–da. この他に túm : zé–ég ; tùm : zé–eb。

β) (i)— : I. 95. このほかにも sig$_{11}$–du$_{11}$: Eme–sal, sig$_{11}$–di(?) (CT. XV. pl. 10, 9 ; pl. 11, 21) を比接出来よう。

u/i 間の浮動は Eme–KU 内部に於いても著しく，S. N. Kramer 教授は地名 šurupak が，šurupak とも šuripak とも書かれている事実を例証しておられる (*New Tablets from Fara*= JAOS, vol. 52[1932], p. 115, note 2) が，他にも gu–du/di *ḳinnatu* ; iti/itu ; šíb/šub 等多数を指摘出来る。

γ) (i)— : III. 83.

(ii)— : III. 95. 〔註終〕

4) Eme-KU : e —— Eme-sal : e (, a)

α)	(i)	E.-K.	^{d}·Umun-èš-a	: E.-s.	^{d}·Lugal-èš-a	"神名",
	(ii)	〃	giš-gù-dé	: 〃	mu-gù-dé	"lute",
	(iii)	〃	níg-dé-a	: 〃	èm (/èg)-dé-a	"結納",
	(iv)	〃	me-en	: 〃	gèn (/mèn)	
	(v)	〃	gèn (/mèn)(?)	: 〃	me	

β)	(i)	E.-K.	é-gar$_8$	: E.-s.	á-mar	"像"。

註)

α) (i)—: I. 109.; (ii)—: II. 152; (iii)—: III. 50; (iv)—: III. 173–174; (v)—: III. 171–172.

β) (i)—: III. 93–95. 〔註終〕

叙上の如く，母音の対応では，/a/ /e/ が安定しているが，Eme-KU /u/ : Eme-sal /e/, Eme-KU /i/ : Eme-sal /u/ の推移は著しく，また /i/ /e/ 相互の浮動も顕著である。

IV) 論　　結

子音の対応では，b, p, ḫ, r, l が安定した姿を見せ，k, z なども比較的落着きを見せているが，/g/ /ğ/ は明瞭な対応関係を示している。

/ğ/ は語頭に於いて例外なく /m/ に移行し，語中に於いては，証明の困難な点は存するが，規則的に /m/ に推移したと考えられる。それに反し語末では，例外なく /ğ/ のまま残存し，その一見して規則的な対応は /g/ の場合とは著しい対立を示している。

/g/ は語頭に立つ場合，一例 (Verbal preformative da- [<ga-]) を除いて，そのまま残存しているが，語中，語末では“一見”複雑な様相を呈している。在来の研究では，そのごく一部に就いて論及されたところはあるが，既述の如き音韻対応を結びつける音韻法則が存在することには気付いていない。例えば，

1) Initial position に於ける d, t, s, š はいかなる条件のもとに eme-sal で z に推移し，いかなる場合にそのまま残存したか，また

2) Final position に於ける g はいかなる場合に b に移行し，いかなる時に g として残ったかというような基本的な疑問をも提示していないのである。

Deimel 教授は，ŠG. p. 49 に於いて，eme-KU の“g”に対して，必ずしも常にではないが eme-sal の“m”が対応する。しかし g : m より遙かに稀にではあるが，“g” (e.-K.) と“d” (e.-s.) とが対応する，と述べておられる。教授の場合には，対応する子音の位置に触れていないのみならず，/g/ /ğ/ の区別さえ行われていない。

また Jestin 教授も，*Abrégé de Grammaire Sumérienne* (p.43) に於いて，この音韻は eme-sal のそれにしばしば (souvent) 対応するとか，この対応はすべての語に起るのではないというより，それからは遙かに遠いという表現を用いているが，これは他

の研究書にも見られる傾向であって，これらの一見不規則に見える対応関係の底に規則的な法則が存在することに気付いていない。

その規則性を証明する為に，先ずもっとも顕著な final /g/ の対応から解明していくことにしよう。

final /g/ を有する語を，今かりに，その eme-sal との対応関係から a) グループ (g : b) と b) グループ (g : g) とに分別して見ると次のようになる：

a) Eme-KU /g/ : Eme-sal /b/

dùg : zé-eb ; sig_4 : še-eb ; dug_4 : zé-eb ; $šag_4$: šab, ša-ab ; gig : gib (?).

b) Eme-KU /g/ : Eme-sal /g/

sig_9 : sig_9 (これは si-ga : si-ga と表記してもよい。以下同じ。)

sig_{10} : sig_{10} (=sì-ga : sì-ga),

zig : zig (=zi-ga : zi-ga),

súg : súg (=súg-ga : súg-ga),

kug : kug (=kù-ga : kù-ga),

$šag_5$: $šag_5$ (=$šà_6$-ga : $šà_6$-ga).

これらのグループを対比させて見て，直ちにクローズ・アップされるのは，sig_4 : sig_9, sig_{10} ; $šag_4$: $šag_5$ は全く同一の音韻環境に置かれているにもかかわらず，ちがった音韻をもって対応する事実である。この対立の理由は Syllabary において，これらの語がどのように表記されているかを見れば直ちに了解される。すなわち，これらのグループの Syllabary に於ける表記は，それぞれまた明瞭な対立を示しているからである。

a) (g : b) グループ

dùg (-ga) : [du-ug].

dug_4 (-ga) : [du-ug], [du-ú].

sig_4 (-ga) : [si-ig].

gig (-ga) : [gi-ig], [gi-e].

b) (g : g) グループ

sig_9 (-ga) : [si-i], [ši-i].

sig_{10} (-ga) : [si/ṣi-i], [si-e].

kug (-ga) : [ku-ú].

súg (-ga) : [su-ú].

$šag_5$ (-ga) : [šá-a], [sa-a].

zig (-ga) : [なし].

なお,

kalag (-ga) : [ka-al], [ka-la].

dirig (-ga) : [di-ir], [di-ri].

geštug (-ga) : [ge-eš-tu].

つまり a) グループの語詞群では, Syllabary の作成された時期に, final /g/ が明白に存在していたと推定されるのに反して, b) グループの語詞群では非常に弱化していたと考えられるのである。そして final position に於いて強くその存在が明示されている /g/ は /b/ に移行したのに反し, Syllabary に於いて /g/ の表記されていない, すなわち消失傾向を有する/g/ は /b/ に移行することなく, そのまま残存しているのである。この事実は何を意味するのであろうか。その推断を下す前に, この問題に関連を持つ次の二つの事項に目を向けて見よう。

その一つは, final /g/ の確認される語で, Syllabary に於いて, /g/ が明記されているにも拘らず, /b/ に移行しない一群の語詞が存在することである。すなわち:

一音節語

dag : [da-ag] ; dug : [du-ug] ; gag : [ga-ag] ; [gug] : [gu-ug] ;

ig : [i-ig] ; mug : [mu-ug] ; níg : [ni-ig] ;

sig : [si-ig], [si-e], R-ba ; síg : [si-ig] ; [sìg] : [si-ig] ;

sig_7 : [si-ig] ; sug : [su-ug] ; sug_4 /sud : [R-ga/R-da] ;

tag : [ta-ag], [ta-a] ; tug : [tu-ug], [tu-ú] ; túg : [tu-ug], [tu-u/ú] ;

ug : [ú-ug] ; úg : [u-ug], ug_4 : [ú-ug] ; zag : [za-ag]

(zíg : [zi-ig], [zi-ib]).

二音節語

agrig : [ag-rig] ; ašlag : [*aš-la-ku*] ; azag : [a-zag] ;

bulug : [bu-lu-ug] ; bulúg : [bu-lu-uk] ; epig : [e-pi-ig] ;
epíg : [e-pi-ig] ; geštu(g) : [ge-eš-tu(g)] ; girag : [gi-ra-ag] ;
ildag : [il-dag] ; iri(g) : [i-ri(g) ?] ; nisag : [ni-sag] ;
pirig : [pi-ri-ig] ; simug : [si-mu-ug] ; šinig : [ši-ni-ig] ;
šutug : [šu-tug] ; unug : [ú-nu-ug] ; usug : [u-sug] ;
zalag : [za-la-ag].

三音節語

azalag : [a-za-lag] (?) → azalag̃ (?)

これらの語は，このままの形で eme-sal に対応する。従って final /g/ を有する語には三つのグループが存在したことを認めなければならない。

a) グループ, sig_4 : [si-ig], etc.
b) グループ, sig_9 : [si-i], etc.
sig_{10} : [si-i], etc.
c) グループ, sig : [si-ig]
síg : [si-ig]
sìg : [si-ig], etc.

a）群とb）群との差異は Syllabary によって明示されるが，a）群とc）群とを特色づける対立は Syllabary によっては示されていない。

先述の問題に関連を有する他の事項は，b) グループ及び c) グループでは Initial position に立つ /s/ /d/ /t/ が /z/ に移行することはないが，a) グループではこの移行が起っている事実である (sig_4 は例外)。すなわち：

a）Eme-KU, dùg : [du-ug] >Eme-sal, zé-eb
〃 dug_4 : [du-ug] > 〃 , zé-eb
(〃 tùm : [tu-um] > 〃 , zé-eb)
(〃 túm : [tu-um] > 〃 , zé-èg̃)
(〃 dím : [di-im] > 〃 , zé-èg̃)
(〃 sum : [su-um] > 〃 , zé-èg̃).

b）Eme-KU, sig_9 : [si-i, etc.] >Eme-sal, si(g)
〃 diri(g) : [di-ri, di-ir] > 〃 , diri(g)

c) Eme-KU, dug : [du-ug] > Eme-sal, dug
〃 dag : [da-ag] > 〃 , dag
〃 síg : [si-ig] > 〃 , síg, etc.

これらの諸事実は，相互に密接な関連を有すると考えられるが，その原因についてはSyllabaryはも早なにも語ってくれない。従って，われわれはこの対立の意味を解明するために，次の仮説を樹てねばならない。

仮説 1)——：b) グループ (g : g) で Final consonant /g/ が Syllabary に於いて表記されていないのは，語尾の発音がこのグループの語では弱かったと推定されるから，このグループでは accent は——もし存在したとすれば——Initial に落ちていた。

仮説 2)——：a, c) グループで final/g/ が常に表記されているのは /g/ が強く，または普通に発音されていたと推定されるから，accent は Final に落ちていたか，または Final の脱落をさまたげるような accent であった。

仮説 3)——：d, t, s が一様に /z/ に移行したのは音声的に見て，一種の Weakening である。

仮説 4)——：仮説 3) から当然，final /g/>/b/ の移行は音声的に，一種の Strengthening の結果であると仮定することが出来る。

もし以上の仮説が承認されるならば，次の結論が得られる：

結論 1)——：a) グループの語群は，Initial consonant が弱められ，Final consonant が強められているのであるから，accent は“前低後高”である。

結論 2)——：b) グループの語群は，Final consonant が弱められているのであるから，“前高後低”のアクセントを有していた。

結論 3)——：c) グループの語群は，Initial consonant が弱められず，Final consonant は強められていないので，“全平”のアクセントを有していた。

それでは一音節語内に於ける，このようなアクセントはどのような種類のものであろうか。一応 toneme が有力な候補として挙げられるであろうが，この問題は二音節語，三音節語に於けるアクセント及び Verbal Complex 内の Affix (preformative, prefix, infix, suffix) が有するアクセントその他との関連に於いて考究されなければならないので，本稿ではこれ以上の推論を下すことは差控えておくことにする。

ただ，今迄の推論から得られる新しい認識に依れば，“語末子音の脱落”に就いての

従来の定説化された見解は全面的に修正される必要があると思われる。

たとえばA. Poebel 教授は前出の論文 *The Root sì(m) and su_{11}(m), "to give" in Sumerian* の41頁 (2, b) で，Final consonant が Syllabary で或る場合には書かれ，或る場合には書かれていない事実を説明して，次のように述べている：

古いシュメール語に於いては，すなわちシュメール語がなお口語であった時代には，語末のamissible consonantは母音で始まる文法要素の続かない限り，規則的に脱落した。しかしながら後期シュメール語に於いては，この amissible consonant の脱落に関する法則は，意識的に，学校ではなはだしく無視された。というのは，シュメール語の教授及び使用がそのような単純化によって，非常に簡易化されたからである。——中略——。語根末の amissible consonant を示していない Syllabary の glosse は多少ともシュメール語が living tongue であった時期の用法及び発音を反映しているのであり，それとは逆に amissible consonant を発音している所の glosse は後期シュメール語の時代の用法を映帯させているのである。

同様な見解は A. Falkenstein の *Das Sumerische* p.29 (及び GSGL, I, p. 47–48) に於いても表明されている：

音節及び語の終音 (Auslaut) に於いて： 子音は音節の終音に於いて，殊に語の終音に於いて往々消失する。この現象は古期シュメール語 (Altsumerisch) の時代にもっとも著しいが，新期シュメール語 (Neusumerisch) 及びそれ以後では，終音は保持されている。

A. Deimel 教授もまた，ŠG. p. 22–23 に於いて "終子音 Schlußkonsonanten のもっとも重要な特徴は，それがごく簡単に消失することが出来る点に存する——後略" という見解を叙べている。

しかしながら，すでに叙説するところがあったように，Syllabary に於ける語末子音の書写有無の対立はその語のアクセントの差異に照応しているのであって，アクセントの存在はエメ・クとエメ・サルとの比較によって明らかにされたのである。Syllabary に於けるそのような現象は，決してシュメール語の語詞が歴史的射程に於いて採録された事実を投影しているのではない。このことは他の面からも反証することが出来る（これについては拙稿 "シュメール・アッカド辞典に於ける語詞採録の史的限界" 『言語研究』第三七号，p. 71～73 参照)。

(筆者は神戸外国語大学講師)